横手高校定時制生徒ら訓練

住民と避難所開設、誘導

横手市の横手高校定時制「青雲館」（佐々木均校長、100人）で5日、大規模地震を想定した避難所開設訓練が行われた。全校生徒と職員、地元住民ら計約140人が参加、市指定避難所として被災者を受け入れる際の対応を確認した。

地元町内会と連携し4年前から毎年夏と冬に体育館で実施している。近くのJR横手駅からも不特定多数の避難者を受け入れる設定。生徒たちは、日頃決めている役割分担に従い▽近隣住民の避難誘導▽乳幼児や高齢者、外国人への個別対応▽物資の受け入れと配布―などに当たった。

このうち受付班の生徒4人は、地元の町内会代表と共同で体育館入り口に窓口を開設。参加者一人一人から名前や住所を聞き取り、名簿を作成した。男子生徒でつくる施設班は、市の倉庫から搬送されてきた段ボールで次々と仕切りを作り、2畳ほどの居住スペースを確保。救護班は、隣接する県立衛生看護学院の看護教員と共に、けが人の応急手当ての模擬訓練を行った。

各班からの情報を基に、簡易トイレを設置したことや食糧の配布時間などを避難所内に知らせた広報班の後藤結花さん（3年）は「訓練を繰り返すたびに他の班との連携が良くなる。情報収集がスムーズにできた」と話した。

地元町内会から初めて参加し、居住スペース作りに加わった高橋清治さん(67)は「生徒たちがてきぱき動いてくれて頼もしい。何かあったらすぐに避難したい」と感心した様子。受付を担当した佐藤友治さん(66)は「万が一の際に混乱しないよう、定期的に訓練を行うことはとても大事」と語った。

同校の防災担当・細井才智教諭は「生徒たちも自らの判断で動けるようになってきた。今後も地域との連携をさらに深めていきたい」としている。

（福原斉）

住民と共同で受付を担う生徒（左）

協力して居住スペースを作る参加者たち

応急手当ての訓練をする生徒たち